日野啓三『地下へ』論 ―初期短篇における一人称の限界―

山根繁樹

はじめに

『地下へ』[1]は、『向う側』[2]、『広場』[3]、『炎』[4]の書かれた一九六六年から二年後の、一九六八年に書かれている。日野啓三は、一九六四年から一九六五年にかけて、初代常駐特派員としてベトナム戦争を取材後、一九六六年に小説を書き始めたが、一九六七年には再びベトナムへ取材に赴いた。『地下へ』は、最初のベトナム体験とその後の創作を経て、二度目のベトナム取材とベトナム戦争担当デスクとしての激務の中で書かれている。[5]

『地下へ』以前の三作品には、それぞれ、内戦状態の現実を捉えようとする、文体上の工夫が見られた。『向う側』では、一人称《私》の語りによる言説と会話のみによって構成される言説とが交互に現れ、《向う側》という言葉の内実に迫ろうとしている。[6]『広場』『炎』は、いずれも人称を固定しない語りによって、小説の、物語としての成立を阻もうとしていた。[7]それらは、ベトナム戦争特派員の経験をインパクトとして小説を書き始めた日野が、日常的な現実や既成の認識の枠組みを超え出る世界を捉えることを目指したものと考えることができる。とりわけ『広場』『炎』における語りは、その複雑さ特異さにおいて、日野の全小説の中でも異彩を放っている。

それらに続いて書かれた『地下へ』は、記者である《私》が、地下活動組織の中心人物を取材するため、「教授」と呼ばれる人物の導きによって、地下組織と接触していく物語である。だが、《私》は、小説冒頭で教授の埋葬式に参列しており、死んだはずの教授の指令で動く人間たちによって組織と接触させられる。《私》にとって、組織の、教授の死に対する考え方や、組織自体の構成のされ方、あるいは組織の論理といったものは、容易に理解しがたいものである。したがって、《私》は、地下組織の中心人物に会うという目的を持ちながら、実際には、地下組織の謎に次々と直面していくのであり、いつ目的が果たされるのか、目的を果たすことは可能なのかといった疑問を持たざるを得なくなるのである。

『地下へ』は、次々と謎に直面する《私》について、一人称で語る物語である。そこには、『広場』『炎』と共通する、ベトナム戦争を思わせる内線状態のただ中にある記者の視点が維持されている。しかし、『広場』『炎』に見られた、「K」という人物を捉える三人称と、《ぼく》（『広場』）あるいは《私》（『炎』）として語られる一人称との混じり合いという語りの特徴は、『地下へ』においては維持さ

れていない。では、『地下へ』においては、どのような世界がどのような語りによって捉えられているのか。本稿では、『地下へ』の分析をとおして、日野自身が〈実験的〉[8]とした初期短篇の可能性と限界を明らかにしたい。

一．死をめぐる相違

教授の死は、教授をとおして地下組織の最高指導者に接触しようとしていた《私》にとって、貴重なニュース・ソースの喪失であった。重ねて、教授に好感を持っていた《私》は、教授の死を個人的に悲しんでもいる。しかし、この後《私》は、死んだはずの教授に指令を受けたという何人かと接触することになる。当然《私》は、その人間たちの言葉を、全面的に信用することができない。それでも《私》は、結果的にその人間たちに導かれて、地下組織の最高指導者に会うための端緒を得るとされる。このように《私》は、死んだはずの教授の手引きで地下組織に入り込んでいくことになり、教授の死をいかに考えるべきかという問題で、地下組織との間に、論理の違いを見ることになる。

《私》の、教授の死の問題に対する態度は、基本的に一貫している。《私》は、教授の死後、それを事実と信じて地下組織の人間に対応する。だが、その《私》の態度とは裏腹に、《私》自身は教授の死体を見ていない。つまり、《私》は、教授が死んだことを自身の眼で確認してはいないのである。さらに、他の参列者に悲しみの表情が見られないことを訝しく思ってもいる。だとすれば、教授は死んだと信じる《私》に反して、実は教授は生きており、地下組織によって教授の死が偽装されたのだと仮定することもできよう。しかし、地下組織の人間たちもまた、教授が死んだことを認めている。教授の死を認めたうえで、それが《終りではない》というのである。まずは《私》と地下組織の人間との、教授の死に端を発する論理の違いを確認してみよう。

《私》は、教授の死を悲しんでいるが、それは、教授と親しくしていたからであり、そうでない人間の死については、次のように感じている。

> まだここにきて半年あまりにしかならない私でさえ、すでにどれだけの死を見てきたことだろう。水田のあぜ道で、林のかげで、国道わきで、都会の路上で、政府の建物に隣り合った映画館の入口で、中央広場の公開処刑場で、憲兵司令部の裏の銃殺場で、荒地の中の政治犯監獄で、川沿いの難民収容所で、死の方がほとんど人間の正常の在り方であるかのように、どこにも、いつでも、死はこの土地の上を公然と歩きまわり、よろめき、横たわり、あるいは風と戯れ、虫たちと親しんでいた。
>
> 最初は思わず顔をそむけ、ついではげしい怒りにかられ、そしていまは率直なところ、私自身、死体にも処刑にも、とくに神経がふるえることはなくなり始めている。

このように《私》は、死を頻繁に目撃しており、死んだ人間を《正常の在り方であるかのように》感じている。だが、それは、人の死に慣れただけであり、死を《人間の正常の在り方》だと確信しているのではない。そのことは、教授のような親しい人間の死に悲しみを感じることにも表れていよう。

しかし、教授の指令によって動くと自称する地下組織の人間たちに導かれてたどり着いた建物の中で、《私》を待っていた二人の男は、教授の死を悲しんでもいないし、重大なことと受け取ってもいない。《私》は、死を《正常の在り方であるかのように》感じてはいるが、死が人間の終わりであるという考えは持ち続けている。そのため、《私》は、男たちが《私》の感謝を教授に伝えておこうと言い、教授の死を重要なことではないということの意味がわからない。《私》と男の一人との間に次のような意見の交換があるが、問題は、二人の依拠する論理の違いである。

「死ぬことが重要なことではないとおっしゃるのですか」

思わず私の声が高まったにちがいない。相手の方が今度は若干驚いたらしかった。男たち二人はちょっと顔を見合せたが、私の顔を改めて見直しながら、男は言った。

「どうしてそんなに大変なことなのです。死は別に終りではないはずですが」

混乱しかけた頭をあわててまとめながら、私は言った。

「何かわれわれの間にはちょっとしたずれのようなものがあるように思われますが、ぼくの理解する限り、あなたのいおうとなさってらっしゃるのは、あなた方の意志と事業は、はじめから当然、死などというものを越えたものであって、つまり俗っぽい言い方で言うと、決死の事業なのだから、死によって終りになるようなものではないと、そういう意味ですね」

「あなたがそう理解されるのなら、それでもいいとしておきましょう。まだわれわれの世界に十分慣れてないわけですから。それにそういう問題はわれわれのところでは、あまりに自明のことなので、私も改めて説明しにくいのですよ」

男の依拠する《われわれの世界》の論理によれば、死が終わりでないことは自明であり、死んだはずの教授に取り計らいの感謝を伝えることも可能だということになる。一方《私》は、死を終わりと考えており、男の言葉の中の《終りではない》を比喩として理解しようとしている。二人は、別々の論理に依拠する。ここでの論理の差異は、端的には、死が終わりであるかないかということである。つまり、人間は、死によって世界から消滅するのか、死んでも世界に参加し続けるのかが問題なのである。それぞれの死が、それぞれの世界において自明のことであるとすれば、その二つの世界は、全く別の世界だといってよい。そして、《私》が全く理解できていないその世界こそが、《地下》ということになるだろう。

埋葬式で悲しみの表情を見せなかった人たちが地下組織の人間だったとすれば、彼らは教授の死を終わりだとは考えなかったため悲しむこともなかった、ということになる。《私》が感じている、死が《人間の正常の在り方》であるような街で、《私》自身の論理とは別の論理で世界を見出す人間が、発見されようとしているといえるだろう。

二．地下組織の構造と論理

《私》の目的は、教授がボスと呼んでいた人物、すなわち地下組織の最高指導者に会うことである。そのために男たちにも会っている《私》は、教授の死の問題を保留して、目的のための話を進めること

にする。その時、《私》は、地下組織が独自の体制を持ち、《地上の人々の世界》とは異なる世界であろうことを予想しているが、死についての考え方を理解できなかったのと同じように、その論理に戸惑うことになる。

男の説明する地下組織の構造は、無数の小グループが隣接するグループと連結して、名も顔も知らない人間からの指令を伝達していくというものである。そのため、男は、実際には教授に会ったこともなく、本名も知らないという。《私》は、それを、拷問によって組織が被害を受けないためだと理解するが、《私》の利害にとっては、切実な問題となる。男は、地下組織の体制を次のように説明している。

われわれの組織は、あなたには想像できないほどのひろがりと、層の厚さと、巧妙な仕組みと構成になっているので、形の上ではわれわれはごく少人数ずつのグループに完全に切り離されているわけですが、それにもかかわらず、というよりはむしろそれゆえに、お互いの身の上や性格やつまらないくせ――精神を集中するときに右手で鼻毛を抜くといったようなことを知らないですむために、より本質的な結びつきを、つねに実感することができるのです。ここの世界は、その意味で、純粋に魂の空間そのものといえます。

そして、《男》は、この非連続の世界の中を、《私》が自分の力で最高指導者のところまで行かねばならないと告げる。《私》は、案内されることを期待していたのだが、その期待は裏切られる。不満を漏らす《私》に対して、男は次のように言う。

ここには直結のルートというのはないのですよ。あなたのいうような仕組みなら、地上と全く変らないではありませんか。切り離されていることによってより本質的につながり、一見不合理なような形態で正しい真実が実現される――というのが、われわれの独自さであり強さでもあるのですよ。地下活動というものを、安易に考えてもらいたくはありません。

《私》は、地下組織の中心にいる最高指導者といえる人物に会いたいと願う。しかし、地下組織の構造は、それを簡単に叶えるようにはなっていない。《私》は、自分自身の力で、中心まで辿り着かねばならないと告げられている、そして、男は、《私》が積極的に為すべきことを示すことはなく、次のように言っている。

「何もご心配なく、ここであなたをひとり突き放して勝手にしろ、というわけでは決してありませんから。あなたはいままでのままでいいのです。そうでなければ、本当のわれわれの姿は見えません」

男との会見は、男のこの言葉で終わる。この会見で《私》は、具体的な成果を得ることなく、ただ地下組織が自分を受け入れようとしていることを知るのみである。《私》が為すべきことは、何も示されていない。まさに《私》は、地下組織に取り込まれて、起こることを自分の目で見ていくしかないのである。

《私》は、男の言う《地上》の論理で地下組織に対峙していたのだが、《私》自身が地下組織に取り込まれ、その世界を生きることになった。その世界は、非連続に分断されつつ広いつながりを持った人間たちによって構成され、男が《魂の空間そのもの》と呼んだ世界である。男の言葉から理解されるのは、その世界では、個々の人間が持つ

肉体の存在感よりも、それぞれの人間と意識において繋がれたと感じることによる存在感の方が重視されているということである。そのように理解すれば、男たちが教授の死を重視しない理由は、次のように考えられる。つまり、教授の肉体が死に至ったことが、教授の意識の消滅を意味することにはならず、教授の意識を実感できる限りは、その存在感も失われないということである。そして、このように考えるには、死によって消滅しない意識があり得なければならない。したがって、それがあり得るとする論理こそが、地下組織の構造を成り立たせ、同時に、《私》と地下組織の人間たちを隔てているのである。

地下組織との論理の相違を残したまま、《私》は地下組織に取り込まれていく。具体的には、《私》は次々と地下組織の人間に接触していくことになる。そして、その接触は、常に地下組織の側から、しかも偶然であるかのように始まり、繋がっていく。厳密には、教授の死後、教授の指令を受けたという人間の言葉を信じてはいない《私》が、前述した男に会うことになったこと自体に、偶然の要素がないわけではない。つまり、男に会うまでの過程ですでに、《私》は地下組織に取り込まれようとしていたのであり、男はそのことを《私》に告げただけともいえるのである。

地下組織の人間たちのうち、幾人かは、偶然に出会った形で《私》と接触する。教授の死後、最初に接触したのは、いつも教授が連絡に使っていた老婆である。その老婆は、教授が死んだはずの時間より後に受けたという連絡を持って現れる。《私》は、その連絡を信じないが、内容がいつも教授と会っていたレストランに行けというものだったため、食事をするつもりで出向く。結局レストランでは誰にも出会わなかった《私》は、女を買う気になり、輪タクを拾おうと、運転手たちの溜まり場に行き、新顔の運転手の車に乗る。すると、その運転手が、男と会見する場所に《私》を運んだのである。もし、《私》が女を買う気にならなければ、《私》と男との会見はなかったことになる。ただ、地下組織側からいえば、《私》を積極的に受け入れる義務はないのであり、ここまでは、《私》が無意識のうちに地下組織の用意した受け入れ体制に乗っていたということにもなろう。あるいは、《私》の心の動きを地下組織側が予測していたともいえる。

《私》が男と会見した場所から帰ろうと拾ったタクシーの運転手もまた、偶然を装っている。夜中、タクシーを拾える見込みのない場所に通りかかったタクシーを、《私》は止めようとする。《私》は、道に飛び出してタクシーを止めるが、運転手は、急ブレーキで止まって怒鳴った後、仕事は終わったといって去ろうとしている。料金の三倍出すということで《私》は車に乗るが、運転手は行き先も聞かず旧聖堂に連れて行く。そして、そこで初めて運転手が地下組織の人間であることが明かされるのである。

「一体何者だ。おまえは。妙なことばかりしやがって」

「そんなことより、あなたには大切な目的があるんじゃないですか。教授からはたしかそういう話でしたがね」

このように、地下組織の人間たちは、当然《地上》の顔を持っており、《私》の目で地下組織の人間をそれとして識別することはできない。つまり、地下組織がいかなる方法で《私》を取り込んでいくのかは、《私》には明らかでないのである。そのため、偶然としか思われない形で接触してくる地下組織の人間たちは、《私》にとって予測不

可能な現れ方をする。《私》は、誰が地下組織の人間なのかわからず、いつ接触されるかわからない。《地上》の人間としての《私》は、不可解な《地下》の論理によって、《地上》に対する見方の修正をも余儀なくされることになるといえよう。

三．取り込まれている《私》

《私》は、男との会見で、地下組織の構造について説明を受け、次のように語っていた。

「そうでなければ、あのような見事な戦いをあなた方が実現できるはずはありますまい。何しろ、ここの地上の政権はもはや名前だけの虚構にすぎないこと、あなた方の地下世界の方が現実的なことは、誰の眼にも明らかなのですから」

ここで《私》は、地上の政権が虚構であるとしている。だが、地下組織に取り込まれていくことを自覚するとき、《私》は、政権だけが虚構なのではなく、《地上》そのものが虚構ではないかと考えねばならなくなる。つまり、男の言葉にしたがえば、それぞれの人間が《地上》において意味づけられ、その意味づけによる役割を果たしてはいても、《より本質的な結びつき》は、《地下》の世界で感じており、《地上》は多分に仮の世界でしかないということである。地下組織が確実に活動していることを認める《私》は、一方で、どこの誰が地下組織の人間であるかわからず、どことどこが繋がっているのかもわからない。《地下》の論理をわがものとしない《私》にとっては、地下組織の構造は不可解で捉えがたいのである。

《私》にとって捉えがたいものではあっても、《私》は、確実に地下組織に取り込まれていく。タクシー運転手に連れてこられた旧聖堂で、《私》は、爆発に巻き込まれる。《私》の乗ったタクシーを追ってきた車が、武装警官の検問を受けるタクシーの後ろに順番を待つかのように停まり、乗っていた男たちは逃げ去り、爆発が起こるのである。結果として《私》は、爆破する建物に連れてこられたにすぎない。それでは、《私》が連れてこられたのは何のためか。意識を回復した《私》は、次のように考える。

あの車に爆薬が積んであって、われわれの車は警官たちを引きつけておくためのオトリだった、とくに私の記者証が――という考えが浮かんだが、実際のテロ工作というのは、そんな小説的トリックとは別物のはずだ。

それにこんな廃墟に近い建物を、どうしていまさら爆破する必要があるというのか。それとも運転手が言いかけたように、ここが対地下工作活動の秘密の本部あるいは収容所、拷問室、処刑場にでもされていたのか。

運転手は、旧聖堂に連れてきた理由を説明していない。そして、合理的に考え得るその理由は、《私》が《小説的トリック》と呼んでいることしかない。つまり、地下組織に取り込まれた《私》は、利用された可能性が高い。いかに《私》が、《そんな小説的トリックとは別物のはずだ》と考えようと、《私》自身、それ以外の理由に思い至らない。《私》には、爆破自体の意味も、爆破と自身との関わりも不明なのである。

そして、下宿に帰った《私》を、女中が、抱きかかえるようにして

出迎える。《私》は、普段無口でおとなしい女中の態度に驚くが、女中は構わず次のように言う。

「よくおやりでしたよ。あれでいいんですよ。わたしはちゃんと信じてましたよ。本当によかった」

「何のことだい、一体、何をいってるんだい」

と私は次第に声を高めながら言ったが、女は熱い息を私の耳に吐きかけながら、くりかえし同じことをささやきつづけるのだった。

「よくおやりでしたよ。わたしたちのところへの第一の門は、見事に通過したわけです。これから先がまだまだ長いのですけれど」

これは小説の最後に近い部分だが、ここに至っても爆破に関する疑問は解けないままである。そして、明かされているのは、女中も地下組織の人間であったこと、爆破が《私》にとって通過しなければならない《門》であったことである。だが、《私》は、新たな疑問を持たされただけでしかない。《私》は、爆破の意味について、爆破と《私》の関わりについて、《私》の行動が評価される理由について、何一つわかっていないのである。

このように、《私》は、確実に地下組織に取り込まれていき、その論理の中で評価すらされているのであるが、《私》自身は何も理解できないでいる。男が言った《そのままでいい》という言葉通り、《私》がそれと自覚することなく行動することが、《地下》の世界を生きることになっているのである。《地下》の論理は明らかにならないまま、《私》は《地下》の世界へと入ってしまったことになる。

四．《私》の可能性

以上のように、論路的には何ら理解できないまま、《私》は地下組織に取り込まれる。《私》が、男のいうように《地上》の論理に縛られているために地下組織の論理を理解できないことは、すでに見てきたとおりである。では、《地上》とはいかなる世界なのか。《私》に即して見れば、タクシーの運転手がタクシーの運転手でしかなく、女中が女中でしかない世界である。つまり、その世界は、タクシーの運転手や女中をそのように意味づけることによって役割を担わせ、同じように役割を担った人間によって構成される。それぞれの役割は、一つの社会を支え、体制を支え、世界を支えている。そして、《私》も、外国から来た新聞記者としての役割を担っているのである。

しかし、地下組織の世界に入り込んだ《私》は、そのような《地上》の世界が絶対でないことを知る。すでに指摘したとおり、《地上》の世界を虚構と考えねばならないのである。《私》が地下組織に取り込まれることの第一の意義は、《地上》の世界が虚構的であり、その論理が絶対ではないことが明らかにされることにあるといえよう。

そして、《私》が《地下》の論理を理解できずに、しかもそれまでの《地上》の論理とは隔たった考え方をし始めることにもう一つの意義があろう。《地上》の論理が絶対でないことは、《私》を取り込んでいく地下組織が確かに存在していることによって明らかであるが、《私》は、《地上》の論理の代わりに《地下》の論理を選んでいるわけではない。《私》にとっては、《地上》の論理とは異なる論理で成り立った《地下》の世界があることは実感できるが、その《地下》の

論理自体は不可解なのである。それでは、《私》はどのように考え方を更新していくのか。《私》が、死の捉え方において、根本的な変更ではないにしても、死が《人間の正常の在り方》であるかのように感じていることは、すでに見た。地下組織に取り込まれ、旧聖堂の爆破に巻き込まれた《私》は、自身の死を意識することによって、死を終わりとしない考え方を得ている。爆破の後、意識を回復した時、それは、次のように語られている。

そうして月光を顔一面に受けながら、じっと横たわっていると、いつの間にか「おれはすでに死んでしまっているのではないか」という気がしてきた。

そしてもし本当にこれが死の状態であって、このように死んでからも、右ひざの痛みと、痛みさえ感じられない額か頬の傷を除けば、何も変りも終りも、従って始まりもしないのであれば、死は別にたいしたことではないのだといってよいようにさえ思われた。

だが、死によってさえも、何も終りも始まりもしないということは、ある意味では、それ以上怖ろしいことはないかもしれない——とまで考えたとき、改めてそんな考えは自分にはおよそ似つかわしくないことに気づいて（月の光は人を不健全に酔わせる）、私は思い切って頭を持ちあげてみた。

ここで、死が終わりでないと考えることは、直接には、これ以前に地下組織の死に対する考え方を聞いていたことに起因するだろう。そして、そのような考えが《私》に自然に思い浮かぶことは、《私》が地下組織の論理を我がものとする可能性を示してもいる。だが、《私》は、その考えを《自分にはおよそ似つかわしくない》として排除しようとするのである。ここで想定されている《自分》とは、地下組織の論理を納得できなかった《私》、つまりは、《地上》の論理で生きる《私》を指している。だが、《私》自身は、すでに《地上》の論理を絶対として生きることに疑いを抱いているといえよう。そのため、それまで持っていた論理では考えなかったことを、自然に思い浮かべてしまうのである。

そこで思い浮かべられた考えは、《私》の中に定着してはいない。それは、《私》が《地上》の論理に替わる論理を持てないことを示している。しかし、ここで排除された考えが、《私》自身の感じていた《人間の正常の在り方》としての死と繋がるものであることは明らかであり、《私》自身の死について考えることによって、人間存在の捉え方を根本的に変更する、可能性が示されているといえる。それは、地下組織の論理を受け入れるということではなく、《私》自身の実感によって論理の変更が行われるという可能性である。ただし、ここではあくまでも、その考えは排除されており、《私》の新たな論理の獲得は、その可能性が示されるにとどまっている。

以上のように、《私》が地下組織に取り込まれていくことによって、《地上》の論理の相対性と、《私》自身の論理の変更可能性が示されている。このととは、最後の場面の含意としても読み取ることができる。先に述べたとおり、最後の場面は《私》が下宿に帰り着いた場面であり、作品を締め括る次の部分は、先に挙げた女中との会話に続く場面である。

私は急に全身の毛穴から、疲労の脂がにじみ出てくるのを感じ

ながら、玄関わきの茂みに咲き乱れているこの小さな黒い花は、たしか紅色だったはずだが、と考えた。

この場面は、前述のとおり、女中さえもが地下組織の人間であったことが明らかになると同時に、《私》が地下組織に取り込まれてしまっていることが明らかになっている場面である。それらが明らかになったことで、《私》の依拠しようとする《地上》の論理の非有効性が示されている。その時、《私》は、紅色だったはずの花を黒い花として見ている。これは、《私》が地下組織の論理が成り立つ世界に足を踏み入れたことの証であろうか。紅色だったはずの花を黒い花と見る目は、世界をそれまでとは異なるものとして見させ、それまでの論理を相対的に退けて別の世界を発見していくことを促すのであろうか。

五．一人称の限界

しかし、この小説に、《紅色だったはずだが》という《私》の疑問に答える者はいない。つまり、すべては、《と考えた》と語る語り手の把握からはみ出すことがない。自己の依拠すべき論理を見失っていく《私》を、過去のこととして語っていく一人称の語り手は、それを物語として語りうるという意味において、決して揺らいではいない。《私》が直面する《地下》の論理が、いかに捉えがたく不可解なものであっても、それに惑乱される《私》は、惑乱されるという安定した物語を生かされることになる。

たとえば、『地下へ』は、《私》が教授の埋葬式に参列する場面で始まるが、冒頭にあるのは、教授の棺を埋める土の音についての、次の一文である。

その音を、私は初めて聞いた。

小説はまず、《私》にとって初めての聴覚的体験の記述から始まる。それは、《意外なほど大きな音》だった。その音については、多くの土が投げこまれた後、次のように語られる。

すでにかなり埋められた棺は、もう音を立てない。土と土のぶつかる鈍い無意味な音がするだけだ。

《無意味な音》になる前の《意外なほど大きな音》は、《私》にとって、教授の棺を埋める土の音として特別な《意味》を持っていたことがわかる。それは、《私》の教授に対する好感を、《私》の聴覚的体験をとおして示す、周到な語りである。しかし、この語りは、常に《私》の感覚に寄り添い続け、そこから逸脱したり、それを相対化したりすることはない。たとえば、教授が埋葬されることは、《地下三メートルの土の中に閉じこめられてひとり横になっている教授の姿》を《私》に思い起こさせもするが、それは、あくまでも《私》の感覚を語るものにすぎない。語りのレベルでは、文字通りの《地下》にいる教授と、《地下》の世界にまるで存在し続けているかのように男たちが言う教授とが語られながら、それらが交錯することはない。それは、《私》の感覚がそれらを混同することがない、という意味でもある。

あるいは、小説のなかで《私》は、街の様子を視覚的に捉えるが、それらのいくつかは、どこか《いつも》とは異なっている。たとえば、食事を終えて、輪タクを拾おうと広場に向かって歩くとき、街は次のように語られる。

広場への通りを歩きながら、何か街の様子がいつもと少しちがっているような気がする。街灯の薄暗いのは発電所爆破のせいだとしても、この時刻ならまだけっこう出歩いてるはずの人通りが何となく少ない。それに時折すれちがう人たちも、妙によそよそしい無関心な顔つきで、ひどく急ぎ足で飛ぶように歩み去るが、(ママ)反対に奇妙にのろのろと漂うような不確かな足つきでぶらついている。

このような《いつも》とは異なる印象が、街の場面ではずっと続いていく。それは、《私》の認識する街の様子がいつもと違っていること、逆の言い方をすれば、《私》の認識がいつもと違っていることを示していよう。だが、この違和感は、小説の中では解消されることも、その意味が明かされることもない。そして、そのような語りの最後に、先に見た《黒い花》の認識が捉えられている。語られる《私》の感覚が《いつもと少し違っているような気がする》形で揺れ、その意味はわからず、それが極まると、自分の感覚自体への疑念が生じる。このような展開は、《地下》の世界に足を踏み入れようとする《私》の認識が揺らいでいくことを示すものである。そして、一方で、それを語る一人称の語りは、まったく揺らぐことがないのである。

この語りの様相が、物語の枠組みを安定させていることは確かである。しかし、その安定は、小説にとっては逆効果なのではないか。極言すれば、安定した語りは、世界の捉えがたさや不確かさをではなく、《私》の精神の不安定さや認識の不確かさを聴き取らせてしまうのではないだろうか。すなわち、『地下へ』を、地下組織の人間たちに翻弄され、混乱していく《私》の物語として読ませてしまうのである。

もし、『地下へ』を、安定しているかに見える《地上》の論理を揺るがす世界に接近していく人間を捉えようとした小説と見るなら、その語りには、目論見から外れた、安定した一人称の限界が現れてしまっているといわざるを得まい。そのことからふり返って、『広場』『炎』を見るとき、物語としては成立しているといえるかどうかも危ういそれらは、しかし、小説としては『地下へ』以上の魅力を持っているように思える。少なくともそこには、捉えがたい世界をそのままに現出させようとする、小説の意志があるように見える。

それでも、際だって特異な『広場』『炎』の語りは、日野啓三にとってあくまで〈実験的〉としかいえないものであって、必ずしも充分な達成感を感じられないものだったにちがいない。日野が小説で目指したことは、いまだ実現にはいたっていないと自覚されていたはずである。おそらくその自覚が、『広場』『炎』とは異なる『地下へ』を生んだのであろう。そして、〈実験的〉と呼ぶしかないような試行錯誤の自覚が、次の小説へと日野を駆り立てていったのではないだろうか。

注

(1) 「文藝」一九六八年一二月。引用同じ。
(2) 「審美」二号、一九六六年三月。
(3) 「南北」一巻一号、一九六六年七月。
(4) 「三田文学」一九六六年一一月。
(5) 日野啓三「年譜」(講談社文芸文庫版『砂丘が動くように』一九九八

年五月）の〈一九六六年〉と〈一九六八年〉には、以下のようにある。

一九六六年（昭和四一年）三七歳

（略）初めての短篇小説「向う側」を季刊文芸誌「審美」に発表。その後三年程の間に、同じようにベトナム戦争を舞台としながら形而上的な想念を書こうとした虚構的で実験的な短篇「広場」「デルタにて」「地下へ」などを書く。（略）

一九六八年（昭和四三年）三九歳

（略）この年の前後、新聞社外報部のベトナム戦争担当デスクとして勤務が激しく、小説を書く余裕がなかった。（略）

自筆「年譜」では、『炎』に触れていない。また、〈三年程の間に〉書いたものとして『地下へ』に言及していながら、発表年である一九六八年の項には、〈小説を書く余裕がなかった〉と記している。

（6）『向う側』については、拙稿「日野啓三『向う側』論―言葉の外部へ向かう試み―」（「近代文学試論」第三一号、一九九三年一二月）をご参照いただければ幸甚である。

（7）『広場』『炎』については、それぞれ、拙稿「日野啓三『広場』論―物語を拒む小説―」（「国語教育論叢」第六号、一九九七年三月）、および拙稿「日野啓三『炎』論―倫理を問う小説―」（松江工業高等専門学校紀要第三二号（人文・社会編）、一九九七年二月）をご参照いただければ幸甚である。

（8）（5）を参照のこと。

（9）『地下へ』は、日野啓三『地下へ／サイゴンの老人　ベトナム全短篇集』（講談社文芸文庫、二〇一三年八月）にも収められている。そこでは、この部分が《歩み去るか、反対に》と改められている。

（やまね　しげき、松江工業高等専門学校教授）